

---

# イレ済み蝶々

ゆチャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イレ済み蝶々

### 【Zマーク】

Z1842F

### 【作者名】

ゆチヤン

### 【あらすじ】

あたしにある“しるし”ねえ、あなたはわかつてくれる?

## 市舞田（前書き）

あたしは、こつになつたら  
この歌から離れられるんだ。

## 市舞四

手を伸ばせばいつだって  
いつだって掴んでくれる人がいた。

でも今は もういない。

夏休みの少し前。

6月の終わり、いつもと同じように  
あたしは屋上でサボっていた。

いつもと同じように建物に隠れるようにして  
誰にも見つかりたくないとか、そんなんじゃないけど  
運よく誰にも見つからないうちで場所だから結構お気に入り。

シャツの襟が風で揺れた。

今日は少し暑い。

この屋上で、いつも夢を見る。  
一生懸命に手を伸ばしてゐるあたしを、  
置いていくひやう、影。

「・・・また」

あの夢か、

と呟くのさえ、億劫なあたし。

何度も思つてもあの頃に戻ることなんて  
言いたいことは山ほどあったはずなのに

「そんなこと無理だつてわかつてゐるはずなのに」

腕を皿に置いて、泣きたこのを我慢した。

## 市舞田（後書き）

作者のゆチャンです、初めまして。  
初めてですが連載です。

読んでくださってありがとうございました。  
次回をお楽しみにしてくださいませ。

**似舞目（前書き）**

あなたは、あたしを助けてくれますか？

## 似舞団

「こつもれひやつて、我慢してゐよな  
「・・・?」

上からの声に、あたしは腕をどかして見上げる。  
太陽の光に反射して、金色が田に入つた。

「我慢するのつて辛くない?」  
「・・・辛くない」  
「何でそりやつて意地張つむかなかなー」  
「・・・張つてない」  
「泣きたいなら泣けばいいんだよ」  
「・・・」  
「ひんだつて怖くないよ」

そつと金子は、高い位置から飛び降りてきた。  
あたしの田の前で座り込んで

「ねえ、蝶子ちゃん」  
「馴れ馴れしい」  
「・・・蝶子ちゃんはさ、何でそんな我慢してゐの?」

田を見てしまった。

金色はあたしを、ただ見つめていた。

自嘲氣味にあたしは笑つた。

金色にじやなくて、もちろん自分に。

「名前も知らないあなたに、あたしの苦しみが分かる訳もない」

金色が笑みを無くした。

でも、もう一度笑って立ち上がつて。

「蝶子ちゃんて、クラスでなんて呼ばれてるか知ってる？」

「…………知らないし、知りたくもない」

・ 黒翅の蝶

「二〇〇〇年版新編日本大字典」

からその船なんだった

卷之三

金色は歯を見せて笑つた。

居心也悪一。

居心地悪い。

「俺はクラス代表で、蝶子ちゃんと仲良くなるためにきました！」

100

右手でピース、それがあたしに向けて。

金色は一力ツと笑つた。

「  
帰  
る」

いつもの帰り道とは、ちょっと違った帰り道。

その日から、何だか変わってきたって気付くのは、もっと先の話。

## 似舞目（後書き）

「んにちわ、ゆチャンです。  
結構楽しくかけました。」

読んでくださって、ありがとうございました。  
次回を楽しみにしててくださいませ。」

## 桟舞目（前書き）

少しずつ、心の中に現れる光り。

## 桟舞目

あの日から少しだけ変わった、あたしの学校生活。  
屋上でサボるのは変わらないけど、

休み時間の度に金色が来るよつになつた。

「蝶子ちゃん、授業受けよつよ」

「・・・やだ」

「みんな、蝶子ちゃんのこと待つてるんだよ?」

「・・・そんな訳ないでしょ」

こんなやり取りが繰り返されて、  
また授業になれば金色は教室に戻つていく。

あたしみたいな、暗い人間より

あの金色は明るい人間たちといた方がいい。

あたしなんて、過去さえ拭いきれない臆病な人間なんだから。

「・・・くつ

泣きたくなつた。

理由なんて分からぬけど、

ただ、無性に涙が溢れて。

「『泣きたいなら泣けばいいんだよ』俺、そう言つたはずだよ?」

教室に戻つたはずの、金色がそこにいた。  
あたしの前で座り込んで、  
いつもの笑顔で、微笑んでいた。

「ほら目赤くなっちゃうから、こすらないで」

「・・・」

腕を引つ張られ、あたしは金色の方に倒れた。  
必然的に金色に抱きしめられる。

「・・・泣きたいなら、俺を呼んで蝶子ちゃん。理由は聞かない、  
泣きたいなら我慢しないで泣いていいんだよ」

また涙が溢れた。

抱きしめられたままで、金色は優しく背中を叩いてくれた。

ただその抱きしめられた感触が、暖かくて怖くなつた。  
また同じことを繰り返すことになるかもしないって、頭のどつか  
で思つてたんだ。

「・・・んじや俺教室戻るからー」  
「・・・」

いつもと同じように笑顔で屋上を歩み立つ。

「……と」

「ん？」

「……あ、りがと」

ほら、その笑顔。

照れくさそうに笑う、金色。

抱きしめられた時、いつもとは何処か違う一面を見た気がした。  
きっと、あたしだけじゃないんだうけど、

その一瞬だけは、金色を信じたくなったんだ。

「みんなー、聞いて…………！」  
「なんだよ、お前いきなり抜けたと思ったら」  
「蝶子ちゃんと少しだけ仲良くなれた気がする…………」  
「…」

今はまだ、数歩の進歩。

## 桟舞目（後書き）

ゆチャンです、こんばんわ。  
何かあたしにも展開が読めないテス。  
少しずつ確信に迫つてければ、と思います。  
次回をお楽しみにしてくださいませ。

## 余舞目（前書き）

絆の痛み。心の傷み。

## 余舞四

「暑いーーー  
「・・・ならセーター脱げばぽいのに」  
「・・・」  
「何でこんのつて顔に書いてある」  
「・・・よくわかつてらっしゃる」

ただや、言いたくなるときだつてあるじやん?

「蝶子ちゃんて何でセーター着てるの?..」

「暑いなら脱げばいいんだよ。みんな腰に巻いたりしてんじやん?  
「・・・セーターでいいよ、うん」

理由は聞かないでつて悟ってくれないかな。

あ、金色には無理か。

「・・・いつも思うんだけど、蝶子ちゃんて細いじやん  
「・・・別に普通じゃない?」  
「セーター着てるの見るとこちが暑くなるんだよね  
「・・・」

自分の両腕を見る。

日陰にいるとはいえ、暑いのは確かだ。  
でも、あたしはセーターがいい。

「・・・理由は聞かない方がいい?」

「・・・うん」

「そつか、なら聞かない」

今の時間は白露らしい。

金色は白露だと知ると、すぐ屋上にきた。

「・・・風が気持ちいいねー」

「・・・そーだねー」

「・・・んじゃ俺そろそろ戻るー」

ケイタイの時計を見ると、休み時間も終盤になっていた。  
また、これから一人の時間の始まり。

「そんな寂しそうな顔しないでよ、蝶子ちゃん」

「・・・してない」

「してるよ、顔に行かないでって書いてある  
書いてなつ」

「・・・あ」

突風があたしの言葉を書き消した。

金色の髪とあたしの黒髪を飛ばす。

そして、あたしは自分のスカートを抑えた。

「・・・バラの・・・刺青?」

「・・・!」

スカートを抑えたのが遅かったのか、

金色があたしの足元見たのが早かつたのか。

無言が訪れた。

お互い何も言わないで  
ただ、風が訪れる。

「・・・お、俺戻る！」  
「・・・う、うん」

金色は勢い良く立ち上がり屋上を走つて行った。  
上履きが床を叩く音だけが聞こえていて。

また一人の時間が訪れた。

何でだろう

こんなこと、今までだつてあつたはずなのに  
離れていく人、ばっかりだったのに、

「なんで、こんなに心がぽっかり開いたような感じになるの」

泣きたいなら泣けばいいって

そんな時は俺を呼んでって言つた金色。

「それじゃあ、金色に泣かされたら、どうすればいいの」

歎せよ、少しうまの味で空に小さく溶けていった。

## 余舞目（後書き）

作者のゆチャンです。  
タイトルの刺青が出てきましたーw  
何だかシリアスな感じですが、  
次回をお楽しみにしてくださいませ。

幕舞田（前書き）

忘れたばずの気持ち。

## 暮舞目

あの日から、金色は屋上に来なくなつた。  
もひ何日かわからぬほど。

理由はこの外腿にある刺青にある。  
この間、刺青を金色が見て以来、  
あいつは来ていない。

勿論、それが当たり前のはずだつた。  
一人でいることが当たり前のはずで、  
一人にも慣れているはずだつた。

だけど、今は  
一人の時間が怖い。

金色に出会つてから  
あの影を夢で見ることも少なかつた。  
だけど、今はまた見てる。

不安で仕方ないんだと思う。  
でも誰にも頼れない。  
いや、頼りたくない。

「・・・帰ろ」

屋上にいる意味もない。

そんな気がして、あたしは軽い鞄を持って屋上を出た。

学校から家まではそんなに離れてない。  
今は金色が近くにいる、学校よりも、  
何処か遠くに行ってしまったかった。

「あの頃に戻りたいなんて思っちゃいけないんだよね」

セーター越しに左胸の上に手を当てた。  
心臓の音、あの頃のあたしの記憶、思い出。  
絶対忘れちゃいけない大事な、こと。

誰かを必要とし、

誰かに必要とされた、蝶子はもう消えた。

今は暗いサボリ魔な蝶子でいい。

このまま、のたれ死ねばきっとそれでいい。

金色のこととは忘れよう。

屋上で話した何もかも。

一緒に話したことや、抱きしめられたこと。

泣きたくなつたら俺を呼べと言つてくれた言葉。

仲良くなりたいと笑つてたこと。

踏み込んでほしくないことこりこりまで

踏み込んできた、あの金色は、  
もつまれよう。

「・・・何、で・・・何でこんなにも苦しいのよ・・・」

自転車置場で、あたしはぐずれるよしひしゃがみこんだ。  
心臓が痛いくらいの音を立て、涙は止まらない。  
こんなことじやダメなはずなのに、

あの時、一人で何もかもやるいと決めたはずなのに。

「・・・ちよ、蝶子ちよん！？な、何でビしたの！？」  
「・・・ぐすり」

そばに近寄ってきたのは金色だった。  
心配そうにあたしを立たせ、背中をさする。

「とつあえず保健室、行こ。ね？」

あたしは何も言えず

言いたいことが山ほどあつたはずなのに  
そのまま金色に保健室へと連れて行かれた。

凄く青く澄んだ空のはずなのに、涙の所為か、淀んだ色に見えた。  
まるで、あたしの今の心の色みたい。

## 暮舞田（後書き）

作者のゆちゃんです、おはよひらいわこます。  
まだまだシリアルス一直線。  
金色くん登場でしたー！  
次回をお楽しみにしてくださいませ。

**禄舞目（前書き）**

心に生まれる、新しい気持ち。

## 禄舞目

保健室は嫌い。

何か無菌室で

あたしがまるでばい菌で言われてるみたいだから。

「はい、座つて」

「・・・ぐすつ」

保健室の先生はいないらしい。

金色はあたしをソファーに座らすと、自分は向かいに座った。

「・・・で、何で泣いてたの？」

「・・・ずつ」

あたしは鞄から取り出したタオルで涙を拭く。

金色は目を見開き、あたしを見ている。

「誰かに絡まれた？あ、もしかして誰かに財布取られたとか」

「・・・」

「先生に呼び出されたとか？誰かに殴られた？」

「・・・」

「そうじゃないとすればー・・・」

「・・・っく」

腕を組んで悩んでいる金色を見ていたら、何だか笑えた。

さつきまで泣いてたと思ったら

いきなり笑い出したあたしに金色は不思議な顔をした。

「蝶子ちゃんが笑つてゐる……」

「……え」

「今までだつて馬鹿にしたり、ほら嘲笑つていの～。そればつかだつたじやん」

「……そつかな……」

「いやつたああああああああああああああああああああああああああ

金色があまりにも嬉しそうに、ガツツポーズをするものだからあたしも何だか嬉しくなつて更に笑つた。

「蝶子ちゃんが泣いてたのは俺が屋上に行かなかつたからー。」「……うん、まあ、そつなるね」

事情を簡単に、あくまで簡単に説明すると金色は何かを考え込んでしまつた。

「俺が、屋上に行けなかつたのはね、みんなに話をしてたんだ」「……話？」

「うん、蝶子ちゃんが刺青してゐて話

「え、ちゅつと、なんで」

何を言ひ出すかと思ひきや、この金色にけしゃあしゃあと……あたしは思わず立ち上がるが、金色が座るよつて言つた。

「みんなにわかつてほしかつたんだ」

「なにを？」

「蝶子ちゃんは刺青」やしてるもの、いい子で笑うと左だけえく  
ぼが出来たりとか」

「・・・」

「刺青を右足にしてて、心に何か抱えてる。でもそれを誰にも言わ  
ないで胸に留めてて」

「・・・」

「誰かに助けを求めるのに、求めちゃダメって泣きたいのも我慢  
してる子だつて」

「・・・」

涙が出た。

こんなにも金色は、あたしのことを見ててくれた。

タオルが涙で既に冷たい。

だけど、これは悲しいのじゃなくて

嬉しい涙だ、

「今は何も言わなくていいよ。ただ、お友達第1号の俺としてはい  
つか、言つてほしけな」

「・・・ありがとう」

お友達第1号は金色の笑顔であたしを見つめてた。  
心が暖かい、そんな風に思つたのは久々だった。

「あ、蝶子ちゃんの刺青見たとさね」

「……ん？」

「ピンクの下着は忘れないからねー。」

「……」

これからはスカートをちゃんと畳えておいたりと頑った。  
しかもピンクって……  
恥ずかしそうにあじやしないつ

「明日から、蝶子ちゃん教室で授業ね？」

「え、なんで」

「みんなが早く蝶子ちゃんに会いたいって」

「……」

「一歩ずつ進んでかなきや、ね」

背中を押される。

前に進む足が、ちょっと重かった。

だけど、後ろに金色がいる。

そう思っただけで、心が軽くなつた。

そして金色は言った

『俺刺青つて初めてだから、あんなに綺麗だったなんて知らなかつたよ』と。

今はまだ、抱えている傷み。  
いつか金色の君に伝えられるよ!』。

## 禄舞目（後書き）

作者のゆチャンです。

何か文章になつてない所がありますが  
それは後で編集します、すみません；；  
それでは次回をお楽しみにくださいませ。

メールフォーム作りました。

何かあればどうぞ。

<http://www.formzu.net/fgen/ex?ID=P83852656>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1842f/>

---

イレ済み蝶々

2010年12月8日02時08分発行